有島記念館の未来を創る若い力：河野紫杏さんの挑戦

北海道大学文学院　博士課程三年　趙珊

有島記念館は、有島武郎の思想や文学を次世代に伝えるための重要な拠点として、北海道ニセコ町にある。この記念館は、地域の住民が文化生活に触れる場であり、有島武郎の世界を体感できる貴重な空間である。そこで活躍する若い学芸員、河野紫杏さんは、地域社会と有島武郎の世界をつなぐ架け橋として、多くの挑戦と経験を重ねてきた。今回は、河野さんがどのように有島武郎の遺産を守り、その魅力を訪問者に伝えているのか、また学芸員としての視点から見た記念館の役割と今後の展望について話を伺った。

河野紫杏（こうのしあん）さん

「小学校から美術館が好きだった」と語る河野さんは、北海道旭川市の出身である。自然豊かな環境の中で育ったことで、自然や文化に対する深い愛着を持っている。

移住の話

河野さんは、新たな挑戦を求めてニセコ町に移住した。「ニセコ町の自然の美しさと落ち着いた環境に魅力を感じました」と語る。ニセコ町は旭川とは異なり、人口が少なく、静かな生活が楽しめるが、「日用品の買い物が少し不便で、車での通勤が必要になることもあります」と、日常生活での不便さも正直に語る。

河野さんにとって、旭川とニセコは似ているようでいて、実際には異なる部分が多いと感じるという。「両方の町は山に囲まれているという共通点がありますが、旭川は都市の利便性を持ちつつも寒さが厳しく、ニセコ町はより自然に近い静かな生活が魅力です」と述べる。風景や環境には懐かしさを感じつつも、それぞれの町での生活は全く異なると感じている。

河野さんが実際に見に行きたい美術作品：
『青いターバンの少女』
河野さんのおすすめ美術館：大塚国際美術館

動機と情熱

河野さんの夢は、幼少期からのものである。彼女は小学生の頃から美術に強い興味を持ち、中学生の頃には学芸員を志すようになった。「子どもの頃からの夢を叶えるために、この仕事に就きました」と語る河野さんの姿勢には、学芸員としての情熱が感じられる。

学芸員の世界

河野紫杏さんは、有島記念館での学芸員として、多岐にわたる業務を担当している。次の展示会にどの作品を展示するかを選定することから始まり、展示の枠に作品を配置し、訪問者が作品を効果的に鑑賞できるようにするまで、その過程全体に関わっている。彼女は作品をどのように展示すれば、訪問者にとって最も魅力的で理解しやすいかを常に考えている。

展示の進行を考える際には、河野さんは作品だけでなく、その背景にある作家の人生や周辺の状況についても深く掘り下げることを大切にしている。

作家が存命のうちに多くの話を聞き、その作品に対する思いや背景を直接理解することで、展示により深い意味を持たせることができると考えている。「作家が生きているうちに、さまざまな話を聞き、作品に関わることだけでなく、その人の人生や周辺の状況についても理解を深めることが大切です。すべてが書き残されているわけではないので……」と河野さんは語る。

2024 年度の企画展（藤倉英幸展）

学びながら成長する河野紫杏さんの挑戦

大学ではデザインを専攻していた河野さんは、主に自身が創作することに重きを置いていた。しかし、有島記念館で学芸員として働く中で、歴史や郷土資料、鉄道、文学といった幅広い分野に関わる必要があり、最初は分からないことも多かったという。「地域に関わる資料や文学に関しては特に知識が乏しかった」と彼女は振り返る。

しかし、展示の企画や進行の過程で直面する多くの挑戦を通じて、「どんどん勉強していくことで理解が深まった」と語り、常に新しい知識を吸収しながら成長してきた。「学びながら仕事をする」という姿勢を大切にし、自己成長を続ける彼女の取り組みは、有島記念館の発展に大きく貢献している。学芸員としての経験を積み重ねる中で、河野さんは地域文化の深い理解と新しい展示の可能性を追求し続けている。

見て飽きない展示を作りたい

将来の目標について、河野さんは「見て飽きない展示を作りたい」と意欲を示す。新しい展示企画や作家との交流を通じて、記念館が地域の文化的な中核としての役割を果たし続けることを目指している彼女の姿勢は、学芸員としての情熱を反映している。

有島武郎（1878～1923）は、明治時代から大正にかけて活躍した日本の作家であり、社会活動家でもあった。彼は裕福な家庭に生まれながらも、個人の自由や平等を重んじる革新的な思想を持ち、その考え方は当時の社会の価値観に挑戦するものだった。彼の生涯は、日本が近代化を進める激動の時代の中で形作られており、その経験は彼の作品や思想にも色濃く反映されている。代表作には、『或る女』『カインの末裔』などがある。

有島武郎と子供の写真

文学と土地が交差する場所：有島武郎とニセコの物語

有島武郎とニセコ町の関係は、彼の人生と思想に深く結びついている。1897 年に「北海道国有未開地処分法」が施行され、有島武郎の父・武がニセコの土地を借り受けて開墾を進めたことがきっかけで、有島家とニセコとの関わりが始まった。武郎は、父の死後、1922 年にその土地を小作人に無償で解放し、土地の私有を否定し「相互扶助」の精神に基づく社会を目指した。この行動は、彼の思想を具現化する重要な出来事であった。

また、ニセコは有島武郎の文学作品の舞台にもなっている。彼の代表作『カインの末裔』は、狩太（現・ニセコ町）を舞台に、自然や社会と調和できずに生きる農夫の姿を描いた作品であり、本格的な写実小説として評価されている。この作品を通じて、有島武郎は日本文壇での地位を確立した。他にも、ニセコは『生れ出づる悩み』や『親子』といった作品の舞台となり、彼の創作活動に大きな影響を与えている。

河野紫杏さんの有島武郎の読み方とその魅力

有島記念館の学芸員として働く中で、河野さんは有島武郎の作品を読み解くことに特別な熱意を持っている。

彼女は、明治・大正時代の作家である有島武郎の作品を読む際、当時の古い言葉遣いや、現代の日常会話では使われない表現に注意を払っている。

「有島武郎の作品には、調べながら読まなければ理解しにくい部分が多くありますが、その注釈を見ながら読むことで、文字から彼の性格や感情をより深く感じ取ることができます」と語る。

例えば、有島の作品の一つ『小さきものへ』を読む際には、家族愛が強く描かれていることに感銘を受けるという。河野さんは、「この作品を読むだけでは、四十五歳で子供を残して愛人と死を選んだ有島武郎の行動が信じられないです」と述べており、その一方で、彼の人生の矛盾や複雑さに対する理解を深めるきっかけとなっている。

河野さんからのおすすめ短編
『一房の葡萄』に収められている
「碁石を呑んだ八っちゃん」

有島武郎の遺産を守る：有島記念館の過去、現在、そして未来

有島記念館は、有島武郎の思想を次世代に伝えることを目的として設立された。設立の背景には、有島武郎が晩年に行った「農場開放」という革新的な行動がある。

記念館の設立には、有島武郎の思想・実績を後世に伝える目的で有島謝恩会が中心となって推進された。

現在、有島記念館は多彩な活動を通じて、その役割を果たしている。常設展示室では、有島武郎の生涯や作品に関連する貴重な資料が展示されており、訪問者は彼の思想や文学の世界に触れることができる。

また、企画展や特別イベントとして、貼り絵展示や地域の芸術家とのコラボレーションなど、多彩な内容で訪問者を楽しませている。

記念館は文化活動の中心としても機能しており、地域社会とのつながりを深めるために、コンサートやカフェを併設。これにより、訪問者がリラックスしながら文化に触れられる環境を提供している。これらの取り組みを通じて、有島記念館は地域住民や観光客にとって重要な文化交流の場となっている。

学芸員の河野紫杏さんは、記念館の今後の展望について強い意欲を持っている。彼女は、記念館が地域社会とのつながりを深めることが重要だと考え、新たな展示企画やイベントを通じて、有島武郎の思想だけでなく、より多くの作家や美術家の作品を幅広い層の人々に伝えたいという思いを抱いている。

常に学び続ける姿勢を持ち続ける河野さんは、有島記念館の発展に全力を注ぎ、新たな知識や視点を柔軟に取り入れながら、記念館の役割をさらに拡大することを目指している。彼女の取り組みは、有島記念館が地域の文化的な中核としての役割をどう果たしていくかを探求し続ける重要な力となり、記念館の未来を築く原動力となっている。

河野紫杏さんのおすすめコレクション：
藤倉英幸作品